

障害児教育コース

コース紹介詳細は
Webページへ



幅広い専門知識と技能を体得し、あらゆる子どもの多様な発達を支援

障害児教育コースでは、障害のある子どもをはじめとする、あらゆる子どもの多様な発達を支援できる特別支援学校教員の育成を目指しています。

一人一人の教育的ニーズに応えるために、子どもの発達援助に関する専門的な知識や技術をもった教員を小学校などに送り出すことも目指しています。専門科目では、障害のある子どもの教育課程や授業論、発達アセスメントや発達援助法等について、教育学・心理学・生理学等に関する講義や演習、実験、実習を通して専門的・系統的に学びます。

卒業と同時に特別支援学校一種と小学校一種の教員免許状を取得することができますが、その他、学生個人の進路計画によりそれ以外の教員免許状を取得することもできます。



● カリキュラム・特徴ある授業や取り組み ●

1年次は、特別支援教育に関する基礎知識や障害の概念について学びます。2年次から知的障害・肢体不自由・病弱を中心に、発達障害や視覚障害、聴覚障害、重複障害、その他特別な支援を必要とする子どもとその支援の在り方について学びを進めます。3年次にはこれまでの学びを土台に、障害のある子どもを観る視点や発達を援助するための教材について演習科目や教育実習を通して理解を深め、特別支援教育に関する専門性を高めます。

● 主な授業科目

1年次	2年次	3年次	4年次
特別支援教育の基礎 I・II	知的障害児教育課程論 知的障害児心理学 肢体不自由児心理学 病弱児指導法 重複障害児教育概論 特別支援教育指導法	障害児教育学演習 I・II 障害児心理学演習 I・II 障害児教育研究法 障害児教育教材研究 発達障害児教育概論	卒業研究の主なテーマ 知的障害・肢体不自由・病弱および発達障害などを対象とした、教育学・心理学・生理学に関する研究(フィールドワークや実験、観察など)

知的障害児教育課程論

知的障害のある子どもが通う特別支援学校の教育課程について学びます。「日常生活の指導」や「各教科等を合わせた指導」など特徴のある教育について、実際の学校場面でどう展開されているかを視聴して話し合ったり、学生自らが実際に指導案を作成して模擬授業をしたりして、実践力を高めていきます。



障害児教育教材研究

子どもの状態に合わせた教材教具を、これまで学んできた特別支援教育に関する理論や実習経験をもとに作成します。また、子どもが楽しめる教材作成を通して障害に関する理解を深めます。作成した教材教具は、附属特別支援学校が発行する「教材・教具アイデア集」に収録し、特別支援学校や小学校の先生に配布されます。



MESSAGE

学生メッセージ

● 4年生 N. H. さん (富士河口湖高校出身)

分からないことを分かるまで、できないことをできるまで、繋がり力の強さによる深い学び

本コースのよさは少人数制を活かした繋がり力の強さ。実習や教員採用試験など、様々な不安もありましたが、先生はもちろん、親身に相談に乗ってくれる先輩や高め合える仲間存在により、不安ゼロで大学生活を送ることができました。不安を自信に変えることができる。障害児教育コースは、そんな素敵な場所です。



教員メッセージ

● 吉井勘人 先生 (専門分野: 教材教具論)

一人一人の子どもに寄り添い、子どもから学び、チームで子どもの学びを支える教育

現代は、人々の多様な在り方を互いに認め合い、誰もが共に生きるインクルーシブ社会を目指しています。障害児教育では、障害のある子ども一人一人の尊厳を大切にし、その子どものよさや可能性を最大限に引き出すことを目指して、チームによる教育を行います。「教育の原点」と呼ばれる障害児教育を学んでみませんか。



病気の子ども自身と 子どもを支える人たちの気持ちを慮る。

みなさんは「病気がある子ども」と聞くと、どのようなイメージをもつでしょうか？

かぜ・インフルエンザなど身近な病気をはじめ、入院による治療が必要な子どもなど様々だと思います。

病気の子どもの支援に携わるには、病気そのものについて正しく理解すると同時にその病気のために子ども自身がどのような心境にあるのかを支援者が慮ることが大切になってきます。

例えば「吃音」という発話障害がある子どもは、約100から120人に1人いるといわれています。正しく周囲の理解がないと、流暢に言葉が出てこないというだけで、からかいやいじめの対象にな

り、深くその本人の心を傷つけることになりかねません。また、吃音がある子ども本人にとっては、「話そうとしても、その言葉が出てこない」状態なので、支援者が「リラックスして」と良かれと思った言葉掛けなのに、本人にとって反対に話すことへのプレッシャーになることもあるのです。

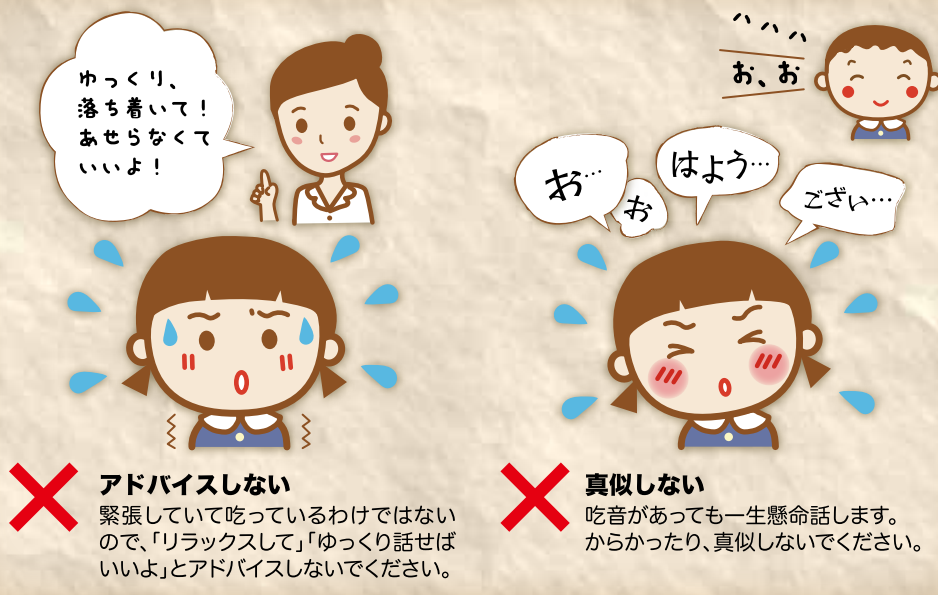
このように病気がある子どもの様々な疾患について理解すると同時に、病気の子どもの心境がどのような状態にあるのかを慮り、どのような手立てが寄り添うために大切であるのかを、みなさんで意見交換をしながら進めることを講義では大切にしています。



川池 順也 Kawaike Junya

大学卒業後、およそ20年にわたり東京都の特別支援学校の教員として勤務。主に病気のために入院と治療を必要としたり自宅で学習に臨む子どもたちのICTを活用した教育支援に携わってきた。教員として勤務の傍ら博士(教育学)を取得。

「皆さんも気を付けて
くださいね！」



アドバイスしない

緊張していて吃っているわけではないので、「リラックスして」「ゆっくり話せばいいよ」とアドバイスしないでください。



真似しない

吃音があっても一生懸命話します。からかったり、真似しないでください。

研究紹介②

重度重複障害がある子どもの 意思伝達について

重い病気があるために手足を自分の意思通りに動かすことが困難な子どもがいます。直近では、人間が自分の意思で動かすことができる残存機能は、視線や脳波であり、その活用で意思表示が可能となると研究が進められています。講義では、実際に重度重複障害がある子どもの学習活動や心理的支援を学んだ後、希望があるみなさんと一緒に視線入力を使った子どもの支援を行っている神奈川の放課後等デイサービスに見学に行く機会も設定しています。そこで、実際に子どもと触れ合ったり視線入力装置の体験をさせて頂いたりしています。

